

脳神経内科

● スタッフ（2021年10月1日現在）

診療科長 相澤 仁志
医局長 加藤 陽久
病棟医長 井戸 信博
外来医長 日出山 拓人

医師数 常勤 16名
非常勤 5名

● 診療科の特徴

当科で診療している疾患は、頭痛やてんかん、認知症などの有病率の高い疾患から、脳梗塞をはじめとした脳血管障害や脳炎などの救急疾患、パーキンソン病およびその類縁疾患、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症などの神経変性疾患、重症筋無力症や多発性硬化症、ギラン・バレー症候群などの神経免疫疾患など、多岐に亘る。近年、神経難病に対しても新しい治療薬が多数開発され、創薬や基礎研究ならびに臨床研究が盛んに行われている。このような先進的な知見も日常診療に積極的に取り入れ、患者さんの日常生活動作（activity of daily life：ADL）の向上、生活の質（quality of life：QOL）の向上、さらにはご家族など患者さんの周囲の方々の負担が軽減するように努めている。高齢化社会を迎え脳卒中や認知症は益々増えている。また、頭痛やてんかんなどは頻度が高い疾患であり、近年、新たな薬剤が開発され患者さんへ提供することが可能となっているが、専門的に診療できる医師は必ずしも多くはない。このような社会的要請に十分に呼応するような診療を心掛けている。なお、神経内科の診療内容をよりよく一般の方々に理解していただくため、日本神経学会の主導のもと、かつては「神経内科」と標榜していた診療科名を、現在では「脳神経内科」としている。

● 診療体制と実績

1) 外来診療体制と実績

本館・2階に外来があり、午前・2診、午後・1診体制で外来診療にあたっている。2021年4月1日～2022年3月31日までの診療実績は、新患611名、再診11,825名、計12,436名であった（病院医事課データ）。専門外来は、脳卒中、重症筋無力症、パーキンソン病、神経免疫疾患、認知機能、脊髄小脳変性症、頭痛、てんかんの各疾患について行っている。新患は、頭痛、めまい、しびれ感、失神など多岐にわたる症状を主訴に来院され、病歴聴取や神経診察を踏まえて、頭部CT、頭部MRI・MRA、頸動脈超音波、脳波、神経伝導検査、針筋電図などの器機を用いて診断する。いわゆる神経難病患者さんは当科外来へ定期通院される方が多いが、脳血管障害患者さんなどでは、一般診療は近隣の先生方へお願いし、定期的な画像検査などの評価のために来院される方も多くおり、地域医療機関との連携を密にとっている。また神経難病を思いながらも在宅療養を余儀なくされる方々

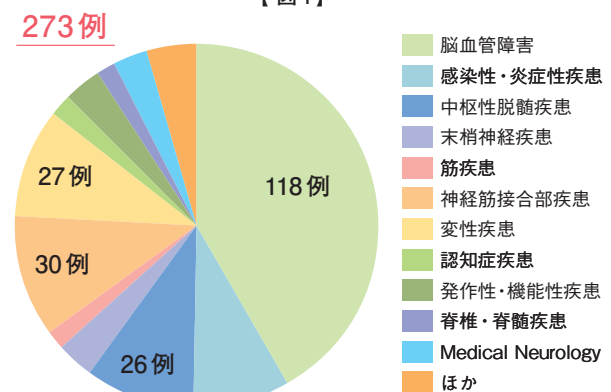
も少なくなく、このような場合にも地域の先生方と連携を取り、患者さんのQOL維持・向上を目標に診療している。

当科では神経心理士を雇用し、脳血管障害、パーキンソン病、多発性硬化症、認知症患者さんなどを対象として、認知機能、遂行機能、注意機能などについて検討し、治療方針の策定や患者さんの生活指導などに役立てている。

2) 入院診療体制と実績

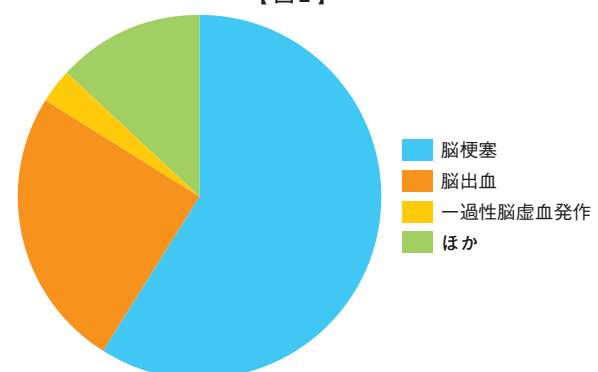
脳神経内科は本館・13階B病棟に22床を有する。図1に2021年4月1日～2022年3月31日までの入院患者一覧リスト（医局管理）より集計した入院患者内訳を示す。同期間における入院患者数は延べ273名であった。内訳として、脳血管障害、パーキンソン病や脊髄小脳変性症・筋萎縮性側索硬化症といった神経変性疾患、多発性硬化症などの免疫関連性中枢神経疾患、神経筋接合部疾患（重症筋無力症）が多く、これらの疾患で入院患者の約75%を占めている。疾病有病率から考えれば脳血管障害が最も多いことは想像に難くないが、パーキンソン病およびその類縁疾患、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、多発性硬化症、重症筋無力症といった希少疾患が相対的に多い（上記期間にて、延べ76名）ことも当科の特徴である。また図2には2021年度の脳血管障害患者の内訳を示す。脳神経内科は脳卒中センターにも参画し、急性期脳卒中診療に貢献している。本邦の脳卒中全体の内訳（脳卒中データバンク2015 中山書店）にも示されているように、脳血管障害患者では脳梗塞を発症する患者数が圧倒的に多く、その多くは保存的治療が選択されることから、当科への脳血管障害患者入院が多くなっている。

【図1】



（2021年4月1日～2022年3月31日：入院患者一覧リストより）

【図2】



（2021年4月1日～2022年3月31日：入院患者一覧リストより）